

誕生をささえるプロの技 —産婆のころと助産婦としての歩み—

毛利 種子¹⁾

今までの時代の変化と助産婦としての自分の歩んできた道「産婆のころ」を語り、その語りを文章にしてみました。

年代	社会	私の生き方とあゆみ
明治初期	・とりあげ婆	
1899(明治32)年 産婆規則	・産婆 ・産婆資格を取得し行政登録	
1948(昭和23)年 保健婦助産婦看護婦法	・助産婦（保健婦、助産婦は看護婦の資格取得前提） ・病院では産婆長が手を添えて介助を指導し、医師は異常がなければすべて助産婦に任せていた時代	<p>実母からの言葉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「産婆は貧乏な人、金持ちの人を境なしに誠心誠意お世話をしてくれる。おまはんも産婆になったらそういう産婆になりなはれ」 ・京都大学助産婦学校（産婆科）を卒業し、京都大学、京都国立病院で助産婦として働く。 ・結婚し、ふたりの子どもを家庭分娩した。 ・じっと静かにそばに寄り添い 自然の成り行きを待つ助産婦のケアを受けこのような助産婦になりたいと思った。
1960(昭和35)年	・病院出産が60%を超える ・助産所出産は危険だといわれる	<p>助産所開設 出張専門</p> <ul style="list-style-type: none"> ・産婆としての仕事が始まる。自宅分娩希望者はほとんどなく、地域の訪問活動が主な仕事となる。 ・病院出産し退院後の新生児沐浴のための家庭訪問。 ・病院出産し退院後の母親たちの状態をみると、とても疲れていることに気づかされる。病院では指導が多く忙しくゆっくりとできなかったという。 ・妊産褥婦の気持も解り、助産婦の仕事の深さを感じる。入院施設を持って自然分娩・自然育児の手伝いをしたいと思うようになった。
1970(昭和45)年	・政府の施策として家庭分娩より病院分娩を推進する時代 ・病院分娩が80%を占める ・助産婦は暴言をはかれ 分娩介助してもお金を支払わない人もおり、産婆にとって惨めな時代	<p>入院1床（有床）の施設の許可を受ける</p> <ul style="list-style-type: none"> ・病院出産80%の時代に入院施設を持ったことは、今振り返るとよくやったと思う。この時代に開業したのは、「産婆の仕事が好きだったから」 ・助産所で分娩を取り扱い母子に良いケアを提供したいと思った（病院出産後の疲労した産後の母親を見て、もっと良いケアをしたいと思った）。 <p>昔の産婆の後ろ姿</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どものころ、自転車によって仕事をする産婆さんの後ろ姿を見て育った。産婆の働いている姿が誇らしく見えた。 ・助産所出産はほとんどなかった。診療所で出産のある時だけ呼ばれ、出産が進行すると医師に手渡しする仕事をした時代もあった。矛盾を感じつつも、その診療所では助産婦が分娩介助は出来なかった。

1) 毛利助産所

<p>1980年代</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 開業助産婦が注目される時代 ・ ラマーズ法や桶谷式乳房管理法によって、開業助産師が注目され、社会で認められるようになってきた ・ 1979年、尾島信夫著『精神予防性無痛分娩』 ・ 杉山次子による「お産の学校」開設 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ラマーズ法の出産がアメリカから日本に入ってきた。 ・ 産む人が主体的に行動し、呼吸法など痛みを乗り越える方法を準備し、家族や信頼する助産婦が側で見守りながら出産をする出産法。 ・ 私も多くの開業助産婦も講習会に出席し勉強した。 ・ 妊婦さん対象の「お産の学校」も生まれ、お産の経過や産痛緩和法を学び分娩を乗り越えることの喜びを求められた。その過程を手伝い導く人が助産婦であった。 ・ 80年代は、ラマーズで花が咲いた時代だった。助産婦も妊婦もともに勉強した。助産所出産を希望される人の第1号が初産婦さんで、その方の口コミで分娩が増えていった。その方はその後2人の子どもを当助産所で産んだ。桶谷式といわれる 痛くない乳房マッサージ法も研修した。助産婦による母乳育児支援も広く世間に知られるようになった。
<p>1990年代</p>	<p>アクティブバース</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ヨーロッパからアクティブバースの出産が発表され、産む人が主体に本能的により積極的に分娩に関わっていく出産のあり方に感銘を受ける。ミシェル・オダン氏の講演に触発され、出産のプライバシー、出産の環境の大きさに気づき、出産のケアが呼吸法中心からお産の環境へと変化した。 ・ バースリボーン、水中出産と大きな門出が開かれた時代だった。毛利助産所も徐々に入院出産を希望してくれる人が増えてきた。
<p>1995(平成7)年</p>	<p>阪神淡路大震災</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 毛利助産所は、全壊した。 ・ 年齢からすれば再建は無理。しかし、この仕事から別れることは心残りがあり複雑な気持ちだった。娘・多恵子助産婦(当時聖路加看護大学教員)が助産所再建に協力することを決意し、再建のため準備に入った。全国の助産婦仲間、お産をした女性たちから応援と支援が届き、再建の後押しとなった。
<p>1997(平成9)年</p>		<p>毛利助産所再建</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「開かれた助産所」を作りたいと思った。 ・ 開業助産婦はどのような仕事をしているのか？ ・ 助産婦は、自然分娩を見守り産婦の産む力を自然の中で引き出しながら援助し、産婦は自然の力で産んだと感ずることができる。そうすると、自然に母乳育児へと移行していく。そして、安心して退院していただける。その時の母子・家族の姿を見せていただくと喜びを感じる。この一連は助産婦が仕事に精心している姿であり、開業助産婦の姿だと思う。この助産婦の姿を見に来ていただき、助産婦の仕事はどんな事か理解していただくために、開かれた助産所を目標に再開した。
<p>2000年代</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 産む自由を妊産婦が求めるようになってきた ・ 妊娠・出産・育児の勉強をして自然分娩を大事にしようとしている時代 ・ 助産師たちが開業助産師たちのケアを学びたいと思う時代 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 助産婦が付き添って、その人らしいお産を体験していただけるようになってきた。 ・ 産む人の立場にたち、産む自由を尊重し、医師中心のお産とは違うケアをしていきたい。お母さんと赤ちゃんが喜ぶケアをしていきたい。謙虚な気持ちでお産と向き合えば神様は罰を与えないと思う。 ・ 赤ちゃんが哺乳しやすい乳房・乳頭の状態をつくること、痛くないマッサージをすることによって、産後の赤ちゃんとお母さんに貢献できることが乳房マッサージであり母乳育児支援だと思っている。 ・ 今までの技を若い助産学生、助産婦たちに伝承していきたい。

文章化には当助産所のスタッフ助産師である有岡美子さん、聖路加看護大学大学院院生 北園さんと櫻井さんにお世話になりました。感謝申し上げます。